秦兆雄　著

中国湖北農村の家族・宗族・婚姻

〈風響社・二〇〇五年二月〉

本書は、一九九四年東京大学大学院に提出した学位論文をもとに大幅に書き直し、日本学術振興会平成一六年度科学研究費補助金の交付を受けて出版したものである。筆者は中国湖北省のある農村地域を対象に一九八九年二月から二〇〇四年七月まで長期的にフィールド調査を行ない、そこから得た資料に基づいて、伝統的な家族や宗族、婚姻関係及び人々の死生観の実態、解放後社会主義近代化の過程で起きた諸変化を具体的に記述、考察した。また、この事例研究から従来の漢人社会の研究に新しい民族誌の資料と視点を加えた民族誌である。

本書は十章から構成されている。即ち、第一章は調査地の概況、第二章は宗族と政治と経済、第三章は家族の変化過程、第四章は婚姻形態、第五章は招婿婚、第六章はイトコ婚、第七章は宗族内婚、第八章は生の儀礼と計画出産、第九章は死の儀礼と火葬について擬態的な資料を提示し、先行研究を踏まえながら分析を行なった。そして終章は主に村人が解放前と解放後から経験してきた日常生活及びその変貌を考察し、近い将来に起こる発展の方向を展望した。

漢人社会の家族・親族・婚姻制度及び死生観に関する先行研究は多く見られるが、本書の新しい論点は主に次の三点であると思われる。まず、漢人社会においては、父系の出自と血縁原理が家族、宗族、婚姻制度及び死生観を規定するほど極めて重要であり、イトコ婚の多様性もこの視点から説明するべきであると指摘した。次に、親族制度や組織及びそれらの変化を歴史的に考察する際に、個人の視点は不可欠であると指摘した。親族関係は、血縁と婚姻によって結ばれる個々人の社会関係の繋がりであり、極めて重要な社会的、政治的、経済的、宗教的な文化資源と安全装置である。ただし、その範囲と認識及び重要性は個人の年齢、性別、世代、階層及び素質や役割などにより異なる。実際、日常生活の中で父系出自と血縁の原理は、個々人の行為、家族、宗族及び婚姻関係などを自律的に規定し組織していくものではなく、特定の状況の中で限定的に作用するものである。従って、著者は組織論ではなく個人を中心とした関係の問題として親族を分析すべきだと考えている。

また、三つ目の論点として、先行研究においては、解放後、伝統的な家族、宗族や、婚姻制度及び人々の死生観に起きた変化を論じる際に、伝統文化は一九四九年以後の土地改革と合作社と人民公社の時期にはかなり破壊されたが、一九七八年以後の改革開放以後は徐々に復活しつつあるという見方が多い。しかし、著者は、土地改革から人民公社期までに見られた合同家族の存続、家長の強い権限、入り婿の復

姓と帰宗現象や、人民公社解体後に起きた合同家族と直系家族の解体及び核家族の急増、老人扶養の深刻さ及び宗族内婚の出現などを取りあげ、従来の見方は不十分であると論じた。即ち、伝統的家族・宗族・婚姻制度及び死生観は人民公社時期には維持、強化されていた一面もあり、改革開放以後には変化、弱化していく側面もあると指摘している。

以上のように、本書はこれまで展開されてきた理論を批判的に検討して問題点を指摘し、この上で、調査地から収集した資料から論点を検証している。なお、本書の「あとがき」で明らかにされるように、調査地は筆者の生まれ育った故郷であるが、筆者はこの利点をいかして、一時的な滞在者にはうかがうことができない事件とその関係者たちの情報を集めることができた。宗族内の分裂状況や、家庭内の不和、男女間の恋物語、「上門女婿」の改姓と復姓などの出来事がいくつも精彩に紹介されており、個人の主体的選択、あるいは社会における個人行為の重要性という著者の論点を分かりやすく説明している。研究対象への親密さと同時に距離感を維持することは、文化人類学者にとって非常に難しい課題であるが、本書はこの難題を乗り越えて成功していると言える。この意味で本書は中国社会・文化研究においてはネイティブによる民族誌が今なお重要だということを示しており、貴重な民族誌として多くの中国研究者、特に大学院生に大いにお薦めしたい。

（高明潔）